

# 岩井郡

## 【上巻】

湯山池



### 岩井郡

同 湯山池 今は僅に残りて小鯉などを取りてひさぐ。是池は

海士池とつゞく水脈小流今もあり。総て佳景の地也。

風寒き冬も知らじな湯山なる

池に住てふ鴛鴦ヲシの夫婦は

同 東浜 古名荒坂浜。行程壹里半。白沙うづたかく、昔より種

つものを生ぜず。漸々高峯をなせり。半途に一ツ山

二ツ山とて在。

鳥ならぬ人あしなどの伝ツッはりて

今もみち知る白砂のはま

同 岩戸浦七山 海岸最一の高山なり。絶頂に駒ヶ池あり。

鎌倉殿の駿馬池月なるもの出産の地なり。池の形僅に

残り。生□トモ

水かれて池の名ばかり有明の

月毛の駒は影もとゞめず

同 穴観音 峠なる茶屋の向。三十三の石体を安置す。

大悲なるかげおがまむと土あなに

はひこむひともありとこそ見れ

同 岩戸巖石尊 岩戸に往く路の側に自然の岩窟あり。中

に石尊を安ず。俗云地蔵は年経て塩風に磨滅マメツして又

新に造り置よし。

地藏こそさいのかはらせたまふとも

誓ひはかたきいはほにぞしる

此七山靈山にて、漁舟沖にて此山頂に靈火燃モユるを占ウラナひ、沖の方ナヒに靡く時は難風にはかに吹とて、常ツネに心を配ると。

神の火の遽ニハカのあれをしらすより

船人あつき影たのむらむ

村中を過サンガシて巉岩サンガンをよち登れば戎の宮に到る。海上の遠望無双の風景なり。是より又魚見小屋に這上る。夕陽滄海に映じて佳景絶妙。

今日もまた草臥ぬらむあかねさす

夕日の脚を洗ふ海づら

同 霧降ヶ飛泉

巍々たる岩壁千仞の上より白玉散乱として常に霧のみふれり。巖下は白浪打寄せて鼓声をなす。此処幽蔭として異境の如し。

きりかゝる滝つ岩ほのするどきに  
打寄る浪もひきやしぬらむ

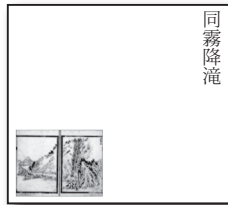
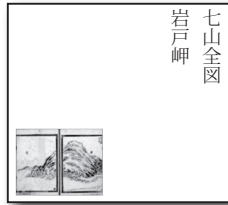
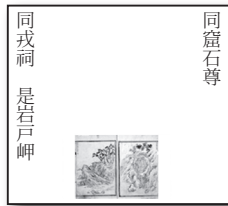
是より街道に返りて坂<sup>墓場</sup>に古墳あり。■<sup>ヤマナ</sup>氏内室の墓なりと。  
因幡志に 岩常城に烟立のぼるを見て自殺ありし由。大五輪なり。  
詳なり

岩常の煙をうらみ果しこの  
冢<sup>ツカ</sup>にも春はもゆる若草

此七山阪、往古は路なめらかにて往還わづらはしかりしが  
頃廻<sup>キドク</sup>国某敷石を造すと。奇特なるかな。此阪口に矢尾左衛門墓とて  
在。

やすやすと四手や三途を越ゆかん

七の山路を造る人なら



網代浦  
虚空蔵岬



黒彦阪



同 岩本邑 網代寺 本尊観世音は往古網代海中観音嶋に出現

の尊像なり。 大同年中観音嶋に出現し給う。凡千余七八十年。

浦人の罪ふかくとも観音の

御手にや救ふ網の名の寺

同 網代浦 観音嶋 是観音出現の嶋にて、于今海士あやまりて

舟を当れば仏罪を蒙るとて近づく者なし。

名におちて海士もゆるすか観音の

千の御手にもあまるうろくづ

同 千貫松 海辺第一の奇巖<sup>キガン</sup>にして、鼎<sup>カタヘ</sup>の如く中は小艇<sup>ズネ</sup>を通ず。

この岩頂に幾千年を経たる老松、岩間に根ざして其緑色  
勝れたり。実に希有<sup>ケウ</sup>の名株<sup>シユ</sup>なり。故に千貫<sup>セン</sup>の称あり。  
我見てもそれが價<sup>アケヒ</sup>は有磯浪<sup>アリソナミ</sup>の

音にきこえし千貫の松

同 虚空蔵菩薩 網代東崖岩壁数百丈の頂に小秀倉を建る。

往こと危くして容易からず。佳景無双也。

遠帆霞をくぐるを見て

針のごと霞をぬつてゆく舟の

真帆さえ海のおもてうらゝか

此海岸より東は嶋姿岩形みな奇絶にして、雅士も舌をまき

詩人も言少きを難ずるといはむ。風景かぎりなし。

色々のしまの見えける礫ばたや

さをなぐる舟横におるなみ

安政の初つかた、此浦に商舶の泊べき間を築きて、七山下の岩石を運送する。

往かいの舟の泊の間をせむと

屏風のやうな石をはこべる

同 白原越

此途尾つたひ往々小砂の為に脚さだまらねば、危き事云ばかりなし。右に谷「く」左に白波眼を驚かし山中僅に小松を生じて総て赤土禿にして取すがる草も稀なり。魂を飛し肝を冷し、からうじて白原に到る。是より数百歩、彼禿たる峯づたひたどりゆけば、小路狭り高峯右にいやたかく、海岸まで峻岨にて、微に脚痕をつたふばかりの路を歩むこと三四十歩、是実に眼暗て脚ふるはれ、たまを消して怖しき事たとふべきなし。左は脚の真下に白浪打寄る。佳景奇絶なり。此崖に尖りたる岩頂毎に小松塩風になれて異形に生て或は相背相向て面白さ比類なし。

汗を握て漸く田後浦に到る。是併当国第一の行路難なり。魂を消し肝をつぶして命にも

かゝるみちとはしらはらのさか

同 菜種島 白原田後の間に在り。半腹より上方小松叢生たる巒山。

東面に暮春の頃菜花全盛なり。時に黄雲潮に浮。

うしかえす波に問ばや誰が作る

春の田後の菜種しま山

同 黒痣阪 岩本より田後への近路なり。山股を登り小禿山の尾

づたひ往々彼小礫の為に脚さだまらず。頂に到ては実に左右とも千仞の幽谷にて眼くれるばかり。遙に大谷浜七山山間より臨む。夫より峠の松まで、峯づたひして漸に心おちつく。暫く憩ふて下る。是往古は左の峻岨をつたひしよし。嘉永の頃今の九曲の路を造るよし。

なかなか踏はづしては呪も

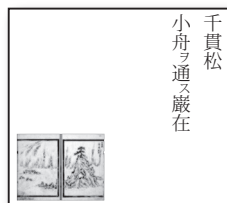
いらずに落るほくろさか哉

同 田後浦 向嶋より松島まで泊舟の間を造んと大石を築たる残れり。

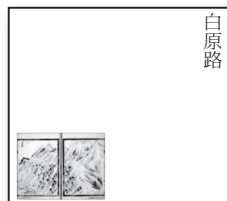
年浪の千々に重ねて寄れども

緑の色は若まつの島

千貫松  
小舟ヲ通ス巖在



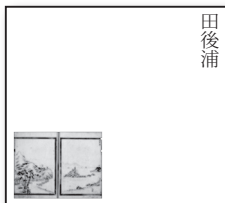
白原路



其二  
菜種島



田後浦



浦住荒砂社



同 黒島 五六丁余沖にあり。此島色々の奇岩とぢ付たり。

黒しまや若和布茹にとゆく蜚も

をのが肌えの色競べせむ

白原より田後の海岸に或は太鼓島、碁石ヶ和田、平島、大嶋、小嶋  
嶋嶋、象ヶ島など、千状万態書画すべからず。

同 浦住 荒砂神社 此山の老松、或ははらばひ或は背向して絶  
妙なり。社頭渾て佳景なり。

心ある人も来て見む浜庇

ひさしく波にあらすなの宮

是より羽尾が崎まで浜づたいなり。沖に

同 羽尾浦 雙子島 万燈嶋 嶋とてあり。風景面白し。

ふた子嶋母の恵の海の面に

見るめもおなじそだち成ける

此頃波風荒かりしが、今朝より海の面和やかになりぬと浦人たちさわぎて、綱引の舟よそひするを見て

なぎもよになるや心も飛鳥の

羽尾がうらにさわぐ船人

万燈島にて毎歳七月十六日の夜、諸霊祭のため篝火を焼とかや。

玉祭る万燈嶋の光りには

海の魚等も浮み出らむ

是よりさきは陸上の阪とて因但の堺、山高く谷深て難所なるゆえ北磯より但州方への便船諸人を送りゆく。彼七阪八峠の嶮岨を経て脚を労せんより、僅の賃にて海上を往ことなり。

九万里に羽をうつ鳥も数ならず

波を飛せておくり行舟

同 牧谷蔵王権現 深山に鎮座。山路数町松柏鬱々としたる高山。諸人尊信す。山奥に飛泉あり。故に御滝と称せり。

諸人の心の駒を水かえや

牧てふ山の奥の御たきに

街道の傍に大石燈籠を建り。嘉永の頃田後に来し間師の建るところ也。当国一二の自然石なり。海濤あらしき時船人祈誓すれば神火を照し給ふとかや。

人の眼に月程高く照すなり

松より上の石の燈籠

同 陸上邑 村民塩を製す。最上品にして吉。

仕立てはなかなか雪を欺むけり

風にも散るな波の花しほ

同 牧谷街道の傍 夜啼地藏 松下に石尊あり。嬰子の夜啼を止る。松の皮を採て燈せば啼止こと速かなりと。

夜啼する児を持つやどは石尊を

今宵もまつのもし火のかげ

同 陸上の山下に洞あり。盜賊穴と言伝ふ。往古但州方の旅客の衣財を剥とりしよし。此山の頂に因但の堺の松あり。

同 本城巖手下嶋根の水 名水なりと。嶋根の称は往古

入海なりし故と。此辺の岩波の痕于今残れり。

汲からに命を延る心地せり

是や蓬が嶋が根の水

同 両股山建巖 双ノ峯白雲を貫て外山の上に秀づ。立岩は

邑より凡 町 阪を越て左の山下を往き、又谷を登れば左方

荊蘿をわけ枝を脚代として漸く直下に到り、蘿の手にすが

り登れば大岩三四あり。岩間より見ては巖下の窟に小祠を祭る。

狙通りの荊に路はふさがれて

梢をつたふ建岩のみち

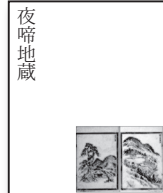
同 岩常城跡 是吉見氏代々居城。近年迄天守址に梨樹残

後三上兵庫頭移居。

羽尾浦



牧谷権現堂



陸上阪



本城嶋根水



本城 建岩愛染明王



同浦留町中  
香林寺境内  
古墳図

長谷寺 尼住持ス



荒金山上 国峯 全



り。是を採て喰へば腹痛するよし。

今は其影だになしの一本や

むかし残ると岩常の城

同 荒金山中国峯 是往古葛城大峯山上止りし時、諸国に

国峯をうつせし遺跡なり。是千余年になる事「にて」、実に老

樹陰々として数千歳の緑苔岩を覆ふ。荊棘路を断て

人跡希なる深山、登り下り艱難を経て大返りの岩間或は枝を力とし根を攀りて往ば飛泉あり。夫より幽谷樹下岩間を経磴を

登りて本社に到る。此地大巖反覆して下にすこの窪ある所

に役行者熊野権現側に爛熳の小祠を置。荒金よりは行程凡

一里計。

国峯や螺の音絶えし窟にも

花の紐のみときむすゝかけ

同 長谷邑 長谷寺 尼寺 什物 頂戴の石臘寿老人。其外

数品。經典御歌などあり。堂宇美なり。

黄鸝のけさなくこえもきたるなり

この山寺に経をよめとて

牛ヶ峯権現 秀峯天際に白雲をぬけ出て万山の上に巍

々として高し。是因但の堺なり。蔵王権現鎮座。十二坊は天

正の兵火に焼亡。可惜。今僅に二字残り。観音堂は右方階の前左

坊、今但州 寺の持なり。

夕日さす牛が高峯の紅葉は

さすがにあかねおもがいと見ゆ

同 蒲生峠 是も因但の堺。街道一の高山なり。脚いと疲れ馬な

らば毛長しといはれむものを我おかしくるしさの余り

這へばうし歩めばつらき阪中に

翅もがなとおもふくるしさ

同 浦留・・・香林寺境内 古墳

是往古宇治の長者の娘細川長者の息子互に恋慕し不遂

後息子京に上り入学す。娘其後を慕ひ忍び夜出て京ニ

走りて息子に遇て共に居一男子を産。後三年学成テ

共に帰国す。稍家路に到り娘夫に告て曰、我家程近し。

暫く此処に待給へと。孩児を与へて疾く往。待こと数刻終

に到らず。怪み其家ニ到り僕婢に問。皆愕然として怪之。

曰其人三年の前死去今日其期日なりと。夫弥疑て其

行跡を語る。家内挙て且怪み且悲歎し不止。其児

成長の後出家し後当寺の住主となると。此僧は即

伯州・・・・通幻大和尚と云。

牛峯全図 法美郡界



同 牛峯ヨリ

但州 遠望



岩井郡

同 牛峯蔵王権現

扇嶺より北方にて因伯に跨る。往古は十二坊ありしが

## 【拾遺卷】

天正の兵火に焼亡す。今僅一坊、右の方に在。左方観音堂。階を登れば籠堂。それより鳧鐘あり。十王峠の途より鳥越へ数十町、山谷を行。鳥越より山路岨しく、総て樹本希にして晴霽たり。坊の前より東に下れば。但州にて、二方郡一円遠望無双なり。半腹に花門あり。越阪内山を経て千谷に下るなり。今は此一山海上村牛峯寺の支配なり。但州領となる。堂宇最古し。

よち登る牛が高峰は夕日かけ

さすがに木々もあかねおもがい

往古は寺の墾田も数百なりし由。千谷の方に今も山裾小丘に寺跡あり。

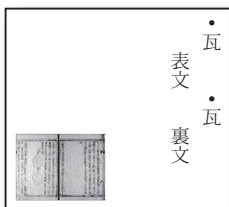
○石井郡岩常二上城は文治年蒲冠者源範頼後裔吉見家代々居城也。  
元弘頃ニや滅却して、後に永祿ノ頃郡中より但州の村岡城主山名山名祐豊の舍弟出石宗鏡寺住持東楊藏司を還俗なさしめ、三上兵庫頭……と称せし二上の城主とし給ふ。布施屋形源七郎豊定と兄弟なり。依て国郡静謐なり。後ニ永祿六亥の頃より鳥取城に居住せる武田豊前守嫡美作守高信が奸謀に迷ひ、連枝布施屋形を討亡す程合戦しぱくくなり。于時武田が一族源五郎を用ひて権を振はせ、家老臣の諫を用ひ給はず。仍て房井土佐守但州ヨリ付家老主を叛て布施へ参勤し、終に三上殿の不意を討て亡しけり。是三上殿は……道竹城にて滅亡なり。毎に二上は山深道峻しき故此城に仮住ありし由、今に二上城墟に梨樹残る。村民此山に粟稗を蒔汚穢を糞すれば其家災あるとて皆怖る。山統に石尊あり。毎年七月廿二日夜明日共群集して祭る。或時栗谷村民云、彼石尊は吾村の仏なりと、闘ひに及。岩常の民衆嘖り、其方の仏ならば其地に祭るべしと彼石尊を崖より谷に落す。其夜又忽然と素の岑に返り立給ふ。皆奇異とす。後洗井の者恐懼すと。又村中に耳塚とて有。村民瘡を祈る。驗ありと。是昔吉見家敵の耳を採り返り塚に築埋せしか

旧き筆記は同村万願寺合吉見家菩提寺の口貝聞寺と云家に在しが、先年盗の爲ニ失却せし由。此谷に吉見代々の墳墓数区荊棘中に在り。又此処に大石舟在り。昔より人敢て取る者なし。先年村の某我庭前の手水鉢にせんと多勢にて取寄しに一夜にて本の処に返り在と。衆恐怖てけりと云伝ふ。是は 谷不動尊旁竹林中ニ今尚存在せり。

(大蔵左エ門墓) 細川村端、七山途辺左山麓。大五輪有。何世何国の人歟。不知。彼子持御前<sup>是三上殿</sup>墓は村民墓処に在り。今も。

○穴居<sup>ケツキヨ</sup>址当国所々に在り。所謂七山竅<sup>アサ</sup>觀音。又岩常万願寺乃竅<sup>アサ</sup>は入口<sup>ハイルバカリ</sup>這入許奥<sup>デウ</sup>甘豊敷程。又同南方にも同竅<sup>アサ</sup>在。其外にも小竅<sup>アサ</sup>有。亦高草郡妙徳寺村山麓<sup>ミソ</sup>箕上山裾<sup>スソ</sup>も方七八畳敷の竅<sup>アサ</sup>あり。亦所々に小竅<sup>アサ</sup>は数々あり。皆上代人居住せし処なり。頼<sup>ヨリ</sup>て山跡<sup>ヤマト</sup>の称あると古書に見へたり。皆平石の蓋を覆ふたり。櫓谷奥<sup>オホ</sup>にも小竅<sup>アサ</sup>あると云。又宇倍野<sup>ニ</sup>も三四竅<sup>アサ</sup>在。

○同郡宇治村田甫<sup>ボ</sup>の中に古瓦<sup>コガハ</sup>あり。是昔<sup>ミ</sup>弥勒寺と云古梵宮<sup>テラ</sup>の墟なる由。其瓦<sup>カワラ</sup>至て古代<sup>コ</sup>ノ物なり。是何<sup>イッレ</sup>の世乃事跡<sup>ジセキ</sup>ならん。若は彼宇治<sup>チヤウジヤ</sup>長者<sup>ボダイジ</sup>の菩提寺ならん乎。予が所持する古瓦<sup>コガハ</sup>は表は菱形裏は布目横條を付たり。厚さ<sup>アツ</sup>五歩計。如<sup>レ</sup>図。



・瓦  
表文  
裏文

○同細川村南の沙漠<sup>スナ</sup>中に屋敷跡<sup>ヤシキアト</sup>と云処より陶器<sup>ウツハモノ</sup>を堀取<sup>ホリ</sup>し由。是所謂細川<sup>イハユル</sup>長者<sup>チヤウジヤ</sup>某<sup>アト</sup>の跡ならん哉。是は天明の頃の事なり。長者家は和銅年来の事歟。只古き咄なり。

岩井郡岩常城墟  
二上峯ト云

同岩常出城 道竹城墟

○細川蛇もち 村奥に池有。向へ七八町も有なん。池西北は砂山なり。此水中に陸<sup>クガ</sup>より二間計の処幅<sup>ハム</sup>二間長<sup>サ</sup>五六十間ノ洲崎<sup>スザキ</sup>の如<sup>レ</sup>キ処有。是一夜中に湧出<sup>ワキ</sup>たり。皆蛇<sup>ジャ</sup>もちと号す。殊<sup>コト</sup>に深淵より泥土<sup>ドロツチ</sup>湧事陰陽不測<sup>イノチ</sup>のこと也。其後年々低<sup>ヒキ</sup>くなり今は水中に沈<sup>シズ</sup>む。今も草など生ず。其後其旁<sup>カタハラ</sup>に十四五間湧出<sup>ワキ</sup>たり。是土氣溢<sup>イツハツ</sup>澆<sup>シユ</sup>する也。富士山又湖水近江<sup>セツ</sup>の説又新井<sup>アライ</sup>の渡なども螺<sup>ホラ</sup>の抜出たる勢<sup>セ</sup>に入海と成など天地運動のなす処。法美郡滝山村山中にも地中より土を堆くあげたる処あり。又天保年間にも数十間<sup>海士ノ</sup>堆<sup>ウツタカ</sup>く成たり。

○銀山 蒲生近き山なり。宮部兵部少輔殿時代同恩地の山にも銀多く出たりと。又法美郡上地村にも銀出たりと。皆古き事哉。時代不知。又光政公御代巨濃郡栗谷と云処より金砂<sup>メシ</sup>に雜<sup>ミ</sup>り出たり。一兩年にて尽<sup>ツキ</sup>たりと云。

○武田又太郎墓 是阿勢井城攻の時討死す。巨濃<sup>コノ</sup>郡長谷山<sup>ナガタニ</sup>奥因但堺<sup>ニ</sup>在と云。